

伝書鳩

第15号

井上靖記念文化財団

傍観者

井上 靖

若い時、[〃]傍観者[〃]という詩を書いたことがある。それから五十年、今も傍観者以外の何ものでもなさそうだ。大体、自分自身の悦び、自分自身の悲しみに対しても、さして真剣にはなっていない。なっていないと言うより、なれないのだ。真剣になろうとすると、もう資金は^{もついで}とってある！

そんな声がどこからともなく聞こえてくる。

悦ぶべき時はとうの昔にあった。悲しむべき時も、とうの

昔にあった筈だ。それなのに、その時は悦びもせず、悲しむこともなく、それが今頃になって、悦びとか、悲しみとか、——こうした思いと対かい合っている時ほど、戦争というものに裏打ちされた己が青春の虚しさに突き当ることはない。

生も、死も、悦びも、悲しみも、^{さいこう}賽子の駒のように、ただそこらを転がっていたのだ。

(『傍観者』より)



傍観者(詩) 井上靖……………2

ご挨拶 井上修一……………6

旧制沼津中学校出身の文学者たち 三人の日本ペンクラブ会長

杉本淳光……………8

断章 木村美智子……………14

もう一人の「グウドル氏」一通の書簡が繋いだ出会い 安道節子……………20

鳩のおしらせ①……………29

井上靖の原郷 伏流する民俗世界② 野本寛一……………30

ヤクーツクを訪ねて 光太夫と靖に導かれた旅 浦城恒雄……………42

父の休息 家族の撮った写真から⑧ 井上卓也……………50

鳩のおしらせ②……………53

平成二十五年度 事業報告 井上修一……………54

鳩のおしらせ③……………61

図書だより……………62

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

一般財団法人に移行して早くも二年半が過ぎました。当初計画した事業の中には、私どもの力不足で思うように進まないものもあり、また、事務局長が止む無き事情で退かれるという想定外の事態も生じました。しかし、代わりの方も見つかりそうですので、皆様のご協力を得て、先を見据えて参りたいと存じます。評議員ならびに再任が決まった理事の方々には、お忙しい中を誠に申し訳ございませんが、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻の程をよろしくお願い申し上げます。

ところで今年は、平成二十年十月十二日に亡くなりました母の七回忌の年に当たります。少し早目でしたが墓参を兼ねて、九月二十一日に身内だけで伊豆湯ヶ島に集まり、菩提寺の妙本寺で法要を営みました。四人の子供とその伴侶、九人の孫とその伴侶、そして十八人の曾孫、計四十四人のほとんどの都合が付き、地元の親類縁者も加わって賑やかな法事

となりました。両親は祝儀も不祝儀も普段は会えない人々が一堂に会する絶好の機会だから、法要も和やかにやればよいという考えを持っていましたので、喜んでくれたことと思います。

一族がこのように多勢になったのは、健康や幸運に恵まれたこともありますが、靖とふみが築いた家庭が、後に続く世代に自分たちも結婚して子供のいる家庭を築きたいと、ごく自然に考えるようにさせたからです。母はともかく、仕事一途の父が家庭人として優れていたかどうかは疑問の余地もありますが、仕事を通して生きることの大切さ厳しさを教えてくれたことは確かです。七回忌に集った人々の顔を見渡していると、われわれは両親から生まれ育っただけでなく、家庭を築くことの大切さを教えられた集団なのだということがよく分ってきました。

平成二十六年十月吉日

旧制沼津中学校出身の文学者たち

三人の日本ペンクラブ会長

杉本淳光（前静岡県立沼津東高等学校校長）

私は、井上靖が卒業した旧制沼津中学校（現県立沼津東高等学校）に校長として三年間奉職し、平成二十五年年度末に定年退職の身となった。社会科教員であった私にとっての井上靖は、「天平の薨」「蒼き狼」「風濤」などの歴史物を書いた小説家であった。

さて、五十代はじめの頃、当時静岡市内の高校に勤めていた私に校長登用試験の日がやってきた。その面接試験の日、全く予期せぬ試験官の質問に頭が真っ白になった。「あなたが最近読まれた本、あるいは御覧になった映画で心に残った作品はありますか」との質問である。どうして高校入試の面接で聞くようなこんな稚拙な質問をしてくれるのだ。本は多少読むが映画は観たくても教頭の忙しさではそんな時間はないのだ

憶がある。幸い、校長に登用され、その後、県教委事務局の課長職もさせていただいた私の最後の勤務校が沼津東高等学校である。

赴任した一年目の冬、井上靖の「あすなろ忌」が伊豆市湯ヶ島で催された折り、たまたま本校の二年生が「夏草冬濤」の感想文コンクールに応募し最優秀賞に選ばれた。表彰式会場に向いた私は、井上靖の御長男の修一氏にお会いする機会を得た。その御縁もあり私が出身大学（東京教育大学）同窓会の県支部長をしていたことから、後身の筑波大学の名誉教授でいらっしゃる修一氏に支部総会での「記念講演」の講師をお願いしたところ、有り難いことに二つ返事でご快諾いただいた。当日の講演は、「父・井上靖を語る」という趣旨のお話で、おぬいばあさんと土蔵暮らしをした幼少の井上靖と、同じように特異な幼少時代を過ごした川端康成とを対比させながら文学者の生い立ちの共通点を語ってくださった。

さて、私は沼東（地元では「ヌマトウ」と言う）勤務の三年間、井上靖、芹沢光治良、大岡信、という偉

と腹立たしかった。そうはいっても、答えなければならぬ。かなりの沈黙の間があったような気がする。

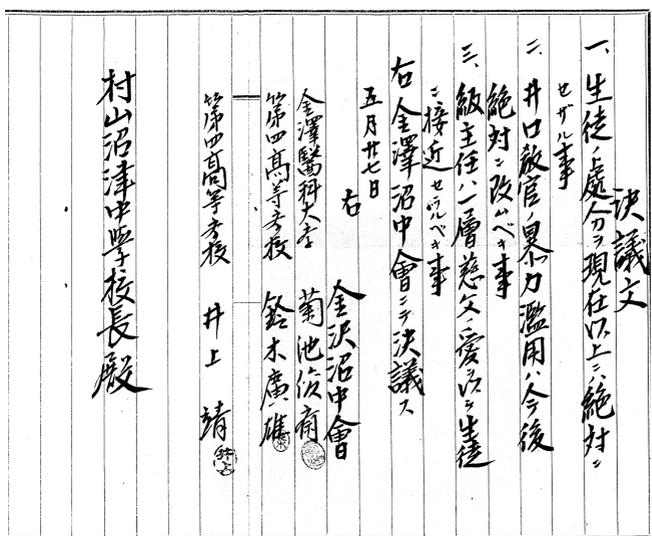
県教育長を含めた二人の試験官は好意的にじっと私を見つめて返答を待っている。その間、私の頭はめまぐるしく回転した。毎日、三島・静岡間の新幹線通勤で小説はいくらでも読んでいるのだ。作品名はいくらでも挙げることはできるのだ。しかし、緊張している私にはその場で言って恥ずかしくない書名が浮かび上がってこない。「まずい。何たることだ。これでは不合格だ」、思いあまった私にひらめきのように浮かんだのは、井上靖の「氷壁」であった。ナイロンザイルのことではなく、たしか美那子の生き方というか美しさに心奪われたというような趣旨の返答をしたような記

大な三人の文学者や多くの著名人を輩出した沼東の底力や、この方々を通して旧制沼中時代の生徒たちの息吹も感じてきた。特筆すべきは、日本ペンクラブ歴代十六人の会長のうち、三人が沼中出身の方々々々である。実は修一氏から本原稿の執筆依頼を受けた時、井上文学への理解も不十分でも困惑したが、沼中出身のペンクラブ会長三人について書いてほしいとのことだったので、お引き受けした次第です。

まずは年齢順で、第五代会長の芹沢光治良。彼は沼津狩野川河口の漁村・我入道がにゅうちうの生まれで、その苦難の人生は自伝的大作「人間の運命」（全十八巻）に余すところなく描かれている。網元の家に生まれた光治良は、漁師になるべきところ、勉学の念止みがたく沼中に入り、やがて一高・東京帝国大学へと進み、中央官庁の役人、そして小説家として大成した。ノーベル文学賞候補にもなり、ペンクラブ会長も務めた。新装復刊された名作「巴里に死す」はともかく、「人間の運命」はあまりにも大長編。生徒には、せめて誕生から

沼中時代を描く第一・二巻は読むようにと強く推薦したものである。折しも、昨年は光治良没後二十年という節目で、沼津市では、文学講演会、演劇その他記念行事が目白押しであった。さて、ペンクラブとの関係だが、「人間の運命」には、戦後、スイスのローザンヌで開かれた国際ペンクラブの大会に出席した会長就任以前の光治良が描かれている。日本が占領下という立場での出席だったが、光治良にとっては、実の父とも慕った亡きペール・石丸助三郎氏——生涯にわたって光治良を庇護した実業家で光治良自身も「ペール」（仏語で父）と呼んだ。彼はスイスで亡くなっている——との心の再会でもあった。ちなみに当時の日本ペンクラブ会長は第四代の川端康成である。大作家になってからの晩年、沼東を訪れた芹沢光治良は、沼中時代をなつかしみ、次のような言葉を残している。「日毎朝礼に富士を仰ぎ偉大な夢をいだきて勉学に励みたり想えば懐かしきかな」。校庭の石碑に刻まれたこの言葉は生徒を力付けている。

全員が外海で遠泳に挑戦する。校歌・応援歌を歌いながらの生徒たちの力泳には驚嘆させられる。先頃、上映された「わが母の記」のラストシーンが私には印象



「金沢沼中会」から沼津中学校長に送られた「決議文」。井上靖の名前もある

次は、昭和五十六年から第九代会長を務めた井上靖。ここで沼東の読書会を紹介したい。例年、夏休みの課題図書として教師が各自一押し of 図書を推薦し、夏休み明けに読書感想文を提出させ、各教師を囲んで読書会を開く。その課題図書はというと、例年のごとく、国語教師のU教諭は「夏草冬濤」、柔道専門の体育科K教諭は「北の海」を推薦する。この二人のこだわりが校長としてはとてもうれしい。日本史専門のO教諭は「おろしや国酔夢譚」、読書家である数学のH教諭は「孔子」という具合に、さながら井上靖の作品だけで読書会が成立してしまう。

恥ずかしながら、私は沼東に赴任して初めて「しるばんば」「夏草冬濤」「北の海」のいわゆる自伝的三部作を読んだ（生徒たちには「読み返した」と言った。「夏草冬濤」は、洪作少年が夏休みの水泳訓練で先輩の五年生にいじめられる恐怖の飛込台体験から始まる。場所は沼津御用邸近くの静浦海岸。実はこの水泳訓練が形を変えて、今も沼東の「海浜教室」という伝統行事に引き継がれている。場所は土肥海岸だが、一年生

的だった。静浦海岸で樹木希林扮する母親を背負った井上靖役の役所広司が沖を見ながら「おばあちゃん……沼津中学の生徒は全員、飛込台まで泳いだんだよ」との回想シーンである。沼東卒業生なら感無量の場面だろう。当時から隣の浜は学習院游泳場。今も愛子様が夏には水泳訓練にいらっしやるようです。

さて、浪人の末、柔道のために入学した金沢の四高時代のあるエピソードがある。当時の沼中学校長に送り付けられた「決議文」と題する不穏な文書が沼東図書館に残されている。井上靖を含む金沢の沼中同窓生連名の興味深い資料である。この決議文は研究者の間ではよく知られているようだが、その背景を探るべく『沼津中学沼津東高百年史』をひもとくと、この決議文に符合するような事実に行き当たった。この『百年史』によると、昭和二年、沼中に軍国主義的教育が浸透し始めたころ、配属将校問題に起因する「同盟休校事件」が発生した。

五月二十一日、学習用具を持たずに登校した五年生がそのまま香貫山かぬきやまに集結した。五年生が一人も登校し

ないことに驚いた学校側は生徒たちを説得するとも市内に住む父兄に事情を説明した。学校側の説得を受け入れない生徒たちは、香貫山麓の靈山寺に場所を移した。生徒たちは協議の結果、村山校長、井口大尉ほか三名の教師の「排斥決議文」を作成するや、これを村山校長に手渡した。その後、父兄会や同窓会の説得にも応ぜず、ことは警察出動の騒ぎにまで発展する。靈山寺立て籠もりは翌日も続く。やがて、この同盟休校に対する学校側が下す処分についての折衝交渉がようやくまとまり、この騒動も終結する。そもそもこの同盟休校の原因は、前日に井口大尉の軍事教練授業が終わり解散する直前、一、二名の者が欠伸あくびをしたらしい。すると「そんなわざとらしいことをする者は出て来い」と言って、二、三人の者が殴られた。かねてから井口大尉の振る舞いに対して日ごろの不満がたまっていたようであるが、この殴打事件がきっかけとなって同盟休校事件として爆発したという次第であった。標的に加えられた教師三名は、井口大尉的をしほらずという生徒の作戦で巻き添えにされたようだ。

物であることが分かった。丸谷の紹介によって大岡の著作・日本詩人選の『紀貫之』がなかなかの作品らしいことを知った。

先頃、その『紀貫之』を読んでみた。紀貫之は「へたな歌よみ」だと正岡子規に罵倒されて以来、古今和歌集も色褪せてしまったという。しかし、漢詩文全盛の時代、仮名文字によるやまとうた自立のために注ぎ込んだ紀貫之の情熱がやがて国風文化への道を切り開く。紀貫之の作品をはじめとする古今の名歌の意義・鑑賞の仕方を解き明かしており、彼の才能の一端を垣間見た思いがした。

ちなみにこの本には、大岡が沼中在学中に作品を寄せた同人誌『鬼の詞しごは』のことが回想風に書かれている。この同人誌は沼東図書館に大切に保存されているが、誌名は同人に加わってくれた若き国語教師・茨木清氏が愛読していた詩人の作品「鬼の語しごは」にちなんで付けられたようだ。だが、『紀貫之』には、正岡子規が絶賛した万葉調の歌人・橘曙たちばなのあけみの「戯れに」と題する歌に由来するとも書かれている。曙あけみは、「燈火ともひ」の

おそらく、金沢沼中会では、母校のこんな騒動を聞きつけ、後輩たちを応援するために「決議文」を校長に送り付けたのであろうと推測される。戦時色濃くなつたこの時期に、配属将校の暴力指導に行動を起こして抗議した在校生やこれを金沢から支援した井上靖等の動きに小気味よさを覚える。折しも、全国的に教員の体罰が問題化しており、体罰根絶の校内研修をするよう県教委から指導があったので、これを材料にして教職員にも紹介したところである。

最後は、第十一代会長の太岡信。生徒への紹介が一番難しい人だった。事実、一度も話ではできなかった。私の怠惰、勉強不足から彼の作品や功績を分かりやすく説明することも、まして作品を推薦することもできなかった。新聞連載の「折々のうた」で彼の名前にはなじんではいたが、詩人であり文芸評論家としての彼を理解する能力は私にはなかった。何年前か、三島駅前「太岡信ことば館」が開館し、その館報から、私が好きな丸谷才一との関わりが深く、彼が絶賛する人

とに夜な夜な来れ鬼我がひめ歌の限りきかせむ、「吾が歌をよるこび涙こぼすらむ鬼のなく声する夜の窓」などと詠んでいるが、ガリ版刷りの同人誌をめくりながら大岡の万葉調短歌や詩などを味わうと、若き日の彼の曙あけみと同じようなその気概が伝わってくるようだ。

以上、沼東出身の三人について書かせていただいたが、私にとっては三島大社前から友人と寄り道しながら沼中へ歩いて通った靖少年、香貫山、我入道、港町千本浜せんぼんはまで悪友たちと学業をほったらかして遊び惚けた彼に一番人間味を感じる。彼は、『沼中東高八十年史』への寄稿文「青春の粒子」で、「私が小説を書くようになったのは、沼中四年間の生活のお蔭であり、その頃一緒に遊び惚けていた何人かの友人のお蔭である。人生というものがどんなものか、生とは、死とは、文学とは、そうしたことについての最初の関心を、私はこの学校の先生や友達から教わったのである」、「そして、「私の生涯で一番楽しい、一番美しい時代であったと思う」と回想している。

「皆さん、ご心配をおかけしました。もう大丈夫です。いま、がんセンターからの帰りですが、問題ないそうです。来年は協会創立三十五周年。私も春にはもう一度北京、負函に行きたいと思っています」

一九九〇年十一月十六日、日本中国文化交流協会の常任理事会でのこと。これが井上靖先生の、会長としての最後のごあいさつとなりました。

東京會館の白いリンネルのテーブルクロスに身を託して、上半身を少し揺らしながら紅潮して話された横顔がいつも目に浮かびます。急性肺炎のため急逝されたのは、この日から二カ月あまり後のことでした。

私は日中文化交流協会事務局に四十八年間勤務しま

した。井上先生にお供して中国を訪問する機会はありませんでしたが、先生は有楽町の事務所によくお見えになりましたし、私たちも世田谷のお宅にたびたびお邪魔しました。事務所で先生を囲んで酒宴になることもありました。そんなときは、好物の「ぎぬかつぎ」や「枝豆」を用意して、事務局全員が嬉々としてお迎えしたものです。

あるときは電話での問い合わせに白土吾夫さん（日中文化交流協会代表理事）が明解な返答をしたりすると、「うれしいですね。その話の続きも聞きたい。帰りに寄ってください」。そして井上家での酒宴です。いろんなことを理由にこの「訪問」は続きました。

井上先生は垣根を作らないかたでした。偉ぶらず、

分け隔てなく、誰とでも気軽に接してくださいました。亡くなられた後、こんなことも聞きました。「あの人たち（協会事務局員）の労苦は大変なものです。それに対し十分報いられないのが気になります」。ある財界人に話された言葉だそうです。細かいことまで気を配られる先生でした。

井上先生との思い出を断片的ではありますが、少しお話したいと思います。

「次は井上さんだ」

一九七九年五月、十四年ぶり、文革後初めての中国作家代表団を招待しました。団長は魯迅との文芸路線上の論争でも有名な周揚先生。

井上先生は歓迎委員長として文芸講演会を取り仕切り、ふみ夫人を同道して奈良、京都に随伴接待をされ、広範な作家を歓迎の輪の中に入れて、細やかな心のこもった接待に力を尽くされました。

そのころ、中島健蔵会長は病床にあり、命且夕に迫るという状態にありました。私は作家代表団の帰国と

時を同じくして、水上勉先生のお供で中国を訪問することになっていました。禅宗六祖慧能ゆかりの地・湖北省黄梅県の東禅院を訪ねる旅です。

出発を前に中島先生にごあいさつに伺いました。「しっかりと見て来いよ」握手を交わしお別れしました。計報は、六月十一日、西湖畔のホテルで聞きました。

その晩はケンチを偲び茅台酒マオタイヂウで献杯。

「次は井上さんだな、井上さんしかいない」そして言葉をついで「その次か、次の次ならばよくがやってもいいよ」。真剣な水上先生の言葉。

翌八〇年、満を持してエース登場、井上会長時代の到来です。協会創立六十年の歴史の中で最も華やかに充実した交流が展開されたことはご承知のとおりです。

出陣式

一九八四年、国際ペン東京大会が開催されることになり、先生は日本ペンクラブ会長としてその準備に奔走されました。

心の友として井上先生を信頼し尊敬していらした圓

城寺次郎先生（元日本経済新聞社社長）は、「井上さんの出陣式をやるう」と、春の一夜、南千住・小塚原の鰻の老舗に招待されました。白土さん、佐藤純子さんと一緒に相伴にあずかりました。

井上先生は目を閉じて、河南省で出会った人々、孔子ゆかりの土地に立った感激などに触れながら、「葵丘会議」の話なさいました。

紀元前六五一年、斉の国でのことです。

開封から百キロほど東北に小さい丘が波立った地帯があります。一番大きい丘が葵丘です。ここで行われた葵丘会議は、まことに高級です。黄河の水を戦争に使わないことを決めた会議です。水を以て兵となすなかれ。隣国を谷となすなかれ。斉王の発言です。すばらしいことは、この結果五百年間それが守られたことです。

先生の眼の輝き、明るい澄み切った少年のような表情が印象的でした。

の旅のことなどを話しているうちに発車のベル。

白土さんが一声、夜のプラットホームでいこう！

星はまたたき 夜ふかく

なりわたる なりわたる……

幾世さん、純子さんと三人の歌声がプラットホームを温かく包みました。

テールランプが遠ざかり、ふと見上げると満天の星、初夏の風がさわやかでした。

黄河文明展

一九八六年、協会創立三十周年の記念行事は「黄河文明展」を中心に次々と大型の事業が展開されました。

この展覧会は、一九八四年、井上会長訪中の際、胡耀邦総書記との会見の席上、井上会長の発案により開催が決まったものです。

中国古代文明の発展を黄河流域の文物によってたどる形のこの展覧会は、豪華で充実した内容と相まって

「核状況下における文学」を主題とする国際ペン東京大会で、葵丘会議の現代的意義を説かれた井上会長の発言は感動的でした。

夜のプラットホーム

あれは一九八六年、日本人として初めて北京大学から名誉博士号をお受けになった時でした。同行者は浦城幾世さん、白土さん、佐藤純子さん、横川健さん。

授与式で記念講演を済ませた先生は、翌日の夜行列車で河南省へ。小説『孔子』の取材です。同じ時期に出光美術館代表団に同行して北京にいた私は、ご一行をお見送りすることになりました。

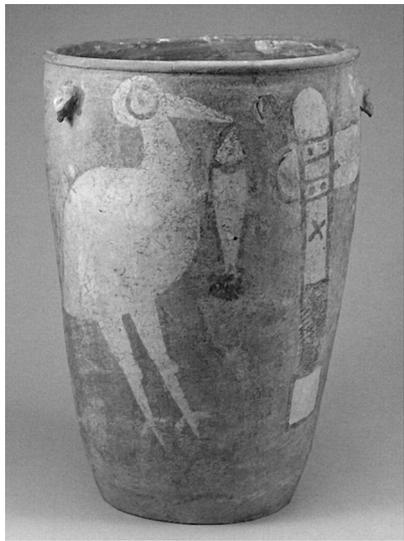
当時は貴賓用として重用されていた自動車「紅旗」に身を置いた先生に続き北京駅へ。いつもと少し違う道走る車を不思議に思っているうちに着いたのは北京駅のプラットホーム。改札口を通るところか寝台列車に横付けです。

誇らしげな少しはにかんだ表情の先生と、これから

大きな反響を呼びました。

『孔子』取材のために黄河流域を歩いていらした先生にとって、この展覧会はとりわけ愛着があり、お気に入りには新石器時代の大きなカメ。とほけたようなコウノトリと魚と石斧がなんとも素直で鮮やかです。

東京、金沢、名古屋での開幕式に出席し、各都市で「黄河文明について」と題して講演をされました。その内容は、内陸アジアや南アジア、ひいてはその背後にある中東、さらにはヨーロッパ地域にまで及び、中



井上先生お気に入りのカメ、鶴魚石斧文彩陶缸（河南省臨汝県閻村出土）

国文化を中心とした東アジア文明、黄河文明へと収斂されてゆきます。作家、詩人であるばかりでなく大学者・大旅行家としても面目躍如です。

名古屋から帰京されたのが八月二十日。お供した私たちには、恐ろしい病魔が先生を襲っていることなど想像だにできませんでした。食道癌が見つかり九月二十九日手術。

その後の先生の体力と気力、ふみ夫人の手厚い看護による驚異的な回復、『孔子』完結までの道のりはいまさら申し上げるまでもありません。

井上靖記念館

ナナカマドの並木、公園の桜・松林を抜けるとひさしの長い純和風の瀟洒な建物が現れます。旭川の井上靖記念館。先生が「笑顔」で迎えてくださいます。

昨二〇一三年初秋の一日、協会事務局のOG（佐藤純子、佐藤祥子、有馬洋子）四名で「世田谷の書齋と応接間」が移転・公開されている旭川の記念館を訪ねました。驚きました。執筆記、応接間の天井まで続く本

実感しています。

幸せにも私は、中島健蔵会長、井上靖会長、その後の千田是也、東山魁夷、司馬遼太郎、團伊玖磨各代表理事による集団指導体制、團伊玖磨会長そして辻井喬会長の時代に事務局に勤務し、さらにそれぞれの会長を支えた白土吾夫さんから直接指導を受けました。白土さんを中心とする協会事務局を私たちは「白土学校」と呼んでいましたが、その白土さんをも含め、皆さん鬼籍に入られました。

白土さんがお元気だったころ、協会を支持してくださったかたがたの死を悼んで「あの世・この世文化交流協会を作ろうか」などと冗談を言っておられました。すでに設立して活躍していらっしやるのではないかと、思ったりします。

最後にふれたいのは都留重人先生（元一橋大学学長・経済学者）のお話です。都留先生は常任理事会に出席されると、出席者からの要望にこたえ、時局と学術を織り交ぜた講話ともいべき発言をなさいました。あるとき「働く」ということについて話をされました。

棚、ソファーなどの調度品はもちろんのこと、手元に置いて愛蔵していらした品々——河井寛次郎の壺、世界各地の記念品、テールクロスからクッション、灰皿に至るまで——すべて当時のまま。空気までも運ばれたか、先生の息遣いさえ感じられます。

ここに至るまでの、修一さん、幾世さんをはじめご弟妹の、先生に対する限りない愛を感じました。

特別の許可をいただいて記念撮影。

幸せな一日でした。

* * *

このたび久しぶりに『日中文化交流』誌を読み返しました。そして、日中文化交流協会が実施してきた文化交流事業の量の豊かさ、質の高さ、幅の広さに改めて感慨を深くしました。

日本にも中国にも政治的経済的あるいはその他の変動があり決して平坦とは言い難い状況の中で、着実に文化交流の成果を積み重ねることができたのは、素晴らしいリーダーに恵まれたことに尽きるということ

この発言の要旨は『日中文化交流』誌記念号に簡潔に収録されていますので、それを引用します。後半は同誌編集部による補足説明です。

「働くということには大きく分けるとレーバーとワークがある。どちらに考えるかが生活の質の大切な柱である。幸せに働いているか否か、働いて生き甲斐を感じているか否かが、ワークとレーバーの違いである。協会の事務局はワークと認めて仕事をしているから幸せだ」。

辞書を繙くと、レーバーは「苦しい仕事」、「辛い労働」となっている。ワークは「ある目的のために意識的に何かをすること」となっていて、「徐々に努力して」が含意されている。

この「発言」を聞き終えたときの、井上先生の満面の笑顔が忘れられません。私自身、まことに幸せな時代を過ごすことができたことに感謝し、「発言」の深い意味を謙虚な気持ちでかみしめています。

安道節子（プール学院大学前事務局長）

長年勤務した大学を退職した後、その大学の資料室に非常勤職員として勤務している。創立一三五周年を迎えたプール学院の資料室には、数々の歴史資料が保存されているのであるが、昨年の夏のこと、書棚の片隅に収められていた一冊のファイルが目にとまった。

ファイルの背表紙には、長崎市にあるミツシヨンスクルの名前が記されていた。手に取って頁を捲ると、そこには長崎市の旧居留地に関するいくつかの文献の写しと、一通の書簡が綴じられていた。その書簡に書かれた「グウドル氏」という文字、それは井上靖の短編小説『グウドル氏の手套』の「グウドル氏」であるのだが、その名が突如として学院の歴史資料に登場したことに、筆者は少なからず驚きと戸惑いを感じたの

である。書簡の消印は昭和六三年七月、差出人は「藤澤全」とあり、そこには、「グウドル氏」と勤務校との少なからざる関係について述べられていた。

* * *

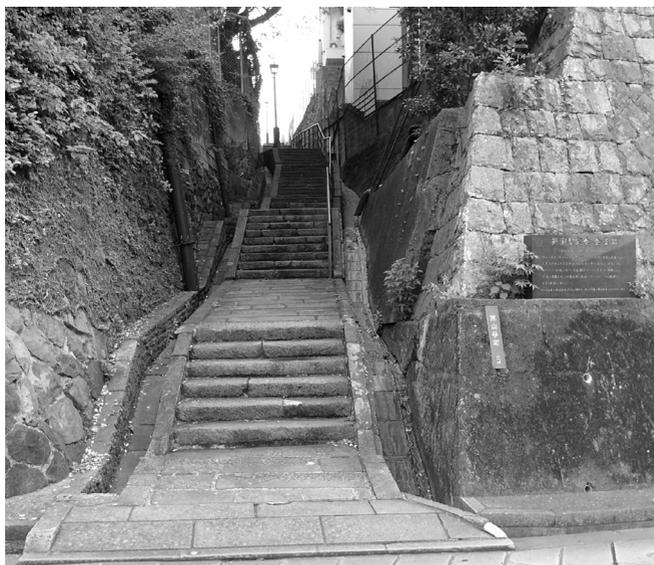
『グウドル氏の手套』は、一九五三年（昭和二八）、四六歳の井上靖が、曾祖父潔の妾であり、靖の育ての親でもあった祖母かかについて初めて書いた自伝的短編小説である。物語は、「私」が初めて訪れた長崎の地で、「自分に多少の関係を持つている明治時代の二人の物故者の、彼等を偲ぶよすがともなるような遺物を偶然にも眼にすることができた」という一節で始まる。

遺物の一つは、友人の案内で訪れた料亭の大広間にかけられていた、医者であった曾祖父の師である松本順の書であった。その翌日、友人に連れられて訪れた坂本町の外人墓地で、「私」は、もう一つの遺物に出会うことになる。「神聖なる記憶」と刻まれた墓石が並ぶ中に、「具宇土留氏之墓」と彫られたE・グウドル氏の墓を眼にするのである。「具宇土留氏」と漢字が宛てられた名は、「私」が幼い頃一緒に暮らしたおかの婆さんが、宝物のように大切にしていた「白い革製の」「ひどく大きい」「グウドルさんの手套」にまつわる思い出へと繋がってゆく。

妾という立場故に「世間の白眼と闘い通した」おかの婆さんを、「奥さんや奥さんや」と呼んでくれた松本順に連れられて、雪の降る日に曾祖父と出かけた麴町の赤十字の本社で、正妻ではないという事情からか、玄関先で待たざるを得なかったおかの婆さんに、外で待つのは可哀そうだと、手套を貸してくれた異人さんの名が「グウドルさん」であった。「グウドルさんの手套」は、おかの婆さんの「一人の心優しい外人への

感謝の気持ちがかめられてある」ものであると同時に「一つの悲しい出来事の記念」として語られるのである。

小説に描かれた「具宇土留氏之墓」は、長崎市の坂本国際墓地に実在する。市電浦上駅東の目覚町からさらに東の丘陵地へ続く坂道は、やがて大きく右にカーブし、間もなく小さな木立の中に、墓地の入り口が見えてくる。入り口の階段を数段上ると、急に空気が静もり、緩やかな坂の奥へと大小様々な墓石が立ち並んでいる。上部にケルトクロスを戴いたその墓所は、墓地のちようど中央にあり、美しい姿を見せている。墓石は、かなり古いものであるが、そこに刻まれた金色の文字は、逝去者名がELIZA GOODALLであること*₁を示している。そしてそれに続き、彼女がC M Sの名譽宣教師であること、その享年は七五歳で、逝去日は一八九三年三月二二日であることなどが記されている。しかし、何よりもまず目に入るのが、そこに眠る人物が男性ではないかと思わせる「具宇土留氏之墓」と漢字で太く彫られた文字である。靖は、この文字が持つ



グードオル女史が校長を務めた十人学校付近

港地を経て、最後に立ち寄った長崎で、先にCMSから長崎に派遣されていたモンドレル師に出会うのである。師の伝道に心を動かされたグードオル女史は、師

どちらかといえば重い印象から着想を得て、「日本人の倍ぐらいありそう」なグウドル氏、そしてグウドル氏の「ひどく大きな手套」といったイメージを作り上げていったのではないだろうか。

靖がこの墓地を訪れたのは、『井上靖全集』別巻に収められた年譜によると、一九五三年（昭和二八）五月に文芸講演会のために福岡、長崎、熊本、大分へと出張したときのことと考えられる。『グウドル氏の手套』には、「十字架や墓石の幾つかは原爆のためと思



坂本国際墓地の「具宇土留氏之墓」

われる大がかりな崩れ方をしていた」と書かれている。爆心から一キロの場所にあるこの墓地は、原爆投下から七〇年もの時を経た現在においても、いくつかの墓石の下には崩れた石が転がり、原爆の被害の大きさを物語っている。幸いなことに「具宇土留氏之墓」は、後に修復され、当初の美しい姿を見せている。

では、「具宇土留氏之墓」の主であり、『グウドル氏の手套』のモデルとなった、もう一人のグウドル氏である ELIZA GOODALL とは、いかなる人物であったのであろうか。いくつかの文献に、その名前を見ることのできる。文献によって、グードル夫人、グッドオール女史、グッドール女史など、様々な表記がなされているのであるが、本稿ではCMSの日本伝道の研究者で桃山学院大学の教授であった木村信一氏の論文に拠り、グードオル女史と表記する。氏の論文に拠ると、エリザ・グードオルは、英国名門の出身で、詩人テニソンの従妹にあたり、夫君は印度駐屯部隊のチャプレンとしてインドに駐在した。夫君の死後、一八七六年（明治九）に五八歳で来朝し、横浜、東京、神戸と開

が旧外国人居留地の東山手九番に日本で初めて開いた神学校において英語を教えることになる。

それから三年後の一八七九年（明治一二）のこと、六一歳の女史は、東山手の中央に位置する三番、すなわち活水学院正門前のオランダ坂を少し上ったところで、一八七五年（明治八）には南山手にグラバー邸を建てたトーマス・グラバーが所有していた地番に、モンドレル師が開設した女子寮、俗称十人学校の校長となった。少人数教育により塾生にクリスチャンホームの躰しづみを身につけさせ、信仰に篤い教養豊かな日本女性を育てようとしたのである。その後も、神学校や出島にモンドレル師が開いた英和学校において英語、聖書等を担当していたというのであるから、女史の毎日には多忙を極めていたと言える。それに加えて、病に倒れたモンドレル夫人が一八八七年（明治二〇）に亡くなるまでの二か月間、付ききりで看護にあたったという。出島の英和学校は、後に神学校となったのであるが、現在徐々に復元整備が行われている出島において、明治初期の姿を遺すただ一つの建造物となっている。



明治初期の姿を遺す旧出島神学校の建物

の夫人である小泉房氏は、五、六歳の頃から十人学校に学んだのであるが、生前、回想記に、グードオル女史は「当時六〇歳くらいであったが、白髪をきれいに頭に巻き自製の（中略）帽子をかぶり裳裾を長く引き全くのレディのよそおいをしておられた」「徹底的なクリスチャンで、語るよりも日々の動作や行為で信者としての信仰をあらわし教えて下さった。生徒は先生の毎日の生活から一生忘れられない大切なものを残して貰うことができた。（中略）其一生は、私ども塾生には生ける聖書そのものように思われ、真に信仰と愛と希望に満ちた聖者」と述べている。^{*4}

東山手一二番館の私学歴史資料館に十人学校の七人の塾生たちを写した一枚の集合写真が展示されている。和服姿に日本髪を結った塾生たちの様子から、グードオル女史が目指した教育を窺うことができる貴重な資料である。しかし、残念なことではあるが、グードオル女史の写真は一枚も遺されていない。この写真に写る塾生の一人で、プール学院の第二代校長の小泉秀氏

来朝から一六年に亘り、私財を擲^{つぎ}って伝道と女子教育に尽くしたグードオル女史は、一八九三年（明治二六）三月に七五歳で永遠の眠りについた。女史は、モンドレル師婦英後の長崎伝導の責任者であったフーラー司祭が願人となり、浦上旧外人墓地（現坂本国際墓地）一二三番に埋葬され、CMSから日本に派遣され

た婦人宣教師の第一号に登録されたのである。しかし、その後いかなる事情があつたのか、女史の事績は墓のある長崎でもすっかり忘れ去られていた。そのグードオル女史の墓所に光を当てたのが、井上靖の『グウドル氏の手套』である。

前述の木村信一氏が、坂本国際墓地にグードオル女史の墓所を発見したのは、靖が『グウドル氏の手套』を著わした一九五三年（昭和二八）から遅れること十数年後の一九六八年（昭和四三）のことである。当時においても、墓石の上部のクロスは三つに割れて地上に転がっていたという。木村氏も、これが原爆によるものではなかったかと述べている。氏の論文に拠り、女史の墓所と事績を知った長崎聖三一教会は、一九七一年（昭和四六）、原爆により焼失した教会堂を復興した際に、その記念事業の一つとして編集した『長崎聖公会略史』に女史の偉業を紹介し、同時に荒廃した墓所を修復し現在に至っている。

一方、女史の始めた十人学校は、一八九二年（明治二五）に長崎女学校と改称され、女史の亡き後も後継

者により長く女子教育に貢献したのであるが、一九〇六年（明治三九）に、当時大阪の川口居留地にあり、ミス・トリストラムが校長を務め、三百人もの生徒がいたプール女学校（現プール学院^{*3}）に合併された。しかし、このことは、プール学院の長い歴史の中で抜け落ちていた出来事であった。一九九〇年（平成二）に刊行された『写真で見るプール学院の一一〇年』には、明治時代のプール女学校に学んだ人たちについて「長崎のミス・グドールの学校（十人学校）の出身者など（中略）日本各地からやってきていた」と記述があるものの、合併については明記されていない。今後、学院資料における明確な記録化が望まれる。長崎女学校が、一八七九年（明治一二）、アメリカから来朝したラッセル女史により東山手に創立された活水学院のように、現在にその姿を残せなかったのは残念であるが、女史のまかれた種は、塾生のその後の人生を支え、また、女史の貴い志は合併したプール女学校に受け継がれ、実を結んだと考えたい。

明治初期から昭和にかけ英国やカナダなどから多く

の宣教師が渡日し、キリスト教の伝道や教育に力を尽くした。筆者の勤務先であるプール学院も、そうした宣教師の働きにより学院の誕生をみている。先ごろNHKで放送され高視聴率を得たという連続ドラマ「花子とアン」にも、主人公の花子が学んだ女学校に、献身的で厳格な姿勢で女子教育に臨む宣教師が登場する。「赤毛のアン」を翻訳した村岡花子は、実際に東洋英和女学校で、作品のモデルとなったカナダ人宣教師ミス・ブラックモアに出会い、英語を習い、薫陶を受けている。封建的な世相であった当時の日本にあって、強い使命感をもって教育に臨むこれらの宣教師の存在なくして、女子教育の礎が築かれることはなかったといっても過言ではない。実は、村岡花子にモンゴメリの書いた「アン・オブ・グリーン・ゲイブルズ」を紹介したのは、長崎女学校がプール女学校に合併する二年前の一九〇四年（明治三七）にカナダから来日し、プール女学校で二七年間教鞭をとったカナダ人のミス・シヨーである。そのミス・シヨーもまた、女子教育の礎を築いた宣教師の一人であった。

* * *

さて、最後に『グウドル氏の手套』をめぐる不思議な出会いについて述べなくてはならない。筆者と『グウドル氏の手套』との出会いは、二〇〇七年（平成一九）のことであったと記憶している。当時、プール学院大学の学長に就かれていた井上修一先生に、表題作が面白いからと、読むことを薦められた『井上靖短篇名作集 補陀落渡海記』（講談社文芸文庫、二〇〇六年）の目次にあった「グウドル氏」という聞きなれない異国人の名前に惹かれて読んだのが最初であった。井上先生は、もちろん、井上靖のご長男でいらっしゃる。靖が坂本国際墓地で見た「具宇土留氏之墓」に眠るグードオル女史が明治初期に築いた長崎女学校が、大阪のプール女学校に合併をし、その学校法人プール学院の大学及び短期大学部学長に、井上修一先生が就かれたことは全く偶然のことであったが、そこに何かしら、不思議な縁を感じずにはいられないのである。靖が著わした『グウドル氏の手套』をめぐる藤澤氏の一通の

書簡により、明治・大正・昭和の時間と空間を超えて、それらが一つの繋がりをみたことは、筆者にとって大きな驚きであるとともに喜びでもあった。『グウドル氏の手套』は、グードオル女史の墓に光をあて、今また、プール学院の歴史に光をあてたのである。「おかの婆さん」と「グウドルさん」、井上靖と「具宇土留氏」、筆者と「グードオル女史」のように、出会いと発見はいつどこで、どのような形で訪れるかわからない。大学の静かな資料室で、次の出会いに胸を膨らませながら古い資料に向き合う日々が続いている。

註

* 1 C M Sとは、Church Missionary Societyの略語で、イギリス教会宣教師会。明治時代には「英国国教会伝導会社」と呼ばれた。

* 2 詩人テニソンの従妹にあたるということに関して、藤澤全氏は英国を訪問し調査の結果、その事実はなかったことを氏の論文で述べられている。

* 3 生徒数が十人内外であったので、「十人学校」という俗称があった。

* 4 『長崎聖三一教会略史 続篇』の発行にあたり、小泉房氏が編著者に寄せたもの。

* 5 学校法人プール学院は、大阪市生野区勝山に本部を置く。二〇一四年六月に創立一三五年を迎えた。

* —本稿執筆にあたり、井上靖研究で著名な藤澤全先生、井上靖ご長男の井上修一先生、日本近代文学研究者で前プール学院大学及び短期大学部学長の木村一信先生から貴重な資料のご提供を頂き、ご指導を仰いだ。また、学校法人プール学院理事長の杉山修一先生並びに学院資料室の松岡興二氏から数々のご助言いただいた。ここに感謝の言葉を申し添えたい。

* —本文に掲載した写真は筆者が撮影した。

参考文献

〈論文〉

木村信一「C・M・Sの日本初期伝導——忘れられた宣教師モンドレルの教育事業」（桃山学院大学キリスト教論集）第五号、一九六九年

藤澤全「グウドル氏の手套考」（井上靖研究）創刊号、二〇〇二年一月

藤澤全「グウドル氏の手套」のモデル——長崎に眠る英国女性」（井上靖——グローバルな認識）大空社、二〇〇

五年四月)

藤澤全「キリシタン残影の舞台——モンドレル神父とグッド
ール女史、そして井上靖」(『言語文化の諸相——近代文
学』大空社、二〇〇六年四月)

〈単行本〉

井上靖『井上靖全集』第四卷(新潮社、一九九五年八月)

井上靖『井上靖全集』別巻(新潮社、二〇〇〇年四月)

元田作之進『日本聖公會史』(普光社、一九一〇年)

長崎聖三一教会史編集委員『長崎聖公会略史』(日本聖公会

長崎聖三一教会、一九七一年)

活水学院百年史編集委員会『活水学院百年史』(活水学院、

一九八〇年三月)

高橋猛夫・永田友諒・鶴田忠正『長崎聖公会略史 続篇——

初期 宣教師たちの働き』(日本聖公会長崎聖三一教会、

一九八一年三月)

プール学院資料室委員会・記念誌編集委員会『写真で見るプ

ール学院の一一〇年』(学校法人プール学院、一九九〇

年六月)

村岡恵理監修『村岡花子の世界——赤毛のアンとともに生き

て』(河出書房新社、二〇一四年四月)



鳩のおしらせ①

◎井上靖記念館(旭川市)行事予定

【企画展】

○「井上靖 初出掲載誌」展

平成二十六年十一月二十二日～二十七年二月十五日

旭川文学資料友の会との共催で、井上靖作品が掲載さ
れた文芸誌を紹介いたします。

○「井上靖と西域紀行」展

平成二十七年二月二十一日～四月

井上靖が西域を訪れた折に書かれた紀行文を、写真と
ともに紹介します。

【講座】

○井上靖講座

各企画展の開催期間中に一回、展示の解説を行います。

次回は、「井上靖と西域紀行」展の解説を、平成二十

七年三月七日に予定。

定員…三十名

入館料・受講料…無料

【読書会】

○赤い実の洋燈読書会ランプ

毎週土曜日午前中、井上靖作品の読書会を実施してい
ます。早く効率的に本を読む以外の読書の楽しさを味
わってみませんか。

○「井上靖 短編小説を読む」

井上靖ナナカマドの会会員による朗読と当館職員によ
る作品解説を行います。

定員…二十名

入館料・参加料…無料

講座や読書会への参加は、左記まで電話でお申し込み
下さい。

問い合わせ…井上靖記念館

北海道旭川市春光五条七丁目

☎〇一六六―五一―一一八八

野本寛一（近畿大学名誉教授・民俗学）

植物との相渉

① 門守りの樹

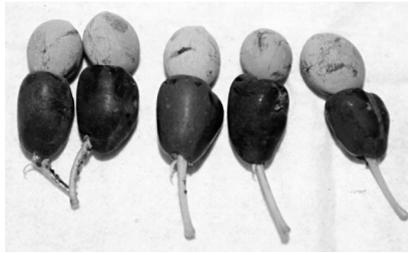
「あすは檜（ひのき）になろう、あすは檜になろうと一生懸命考えている木よ。でも、永久に檜にはなれないんだって！ それであすなろうと言うのよ」——天城山中の翠檜（あすなろう）の老樹の近くで心中死した冴子が、生前、鮎太の家の庭にある翠檜の木について小学生の鮎太に語った言葉として『あすなろ物語』に登場する。そして、中学生になった鮎太は、下宿している寺の、年上の娘雪枝から、「学問もだめ、鉄棒もだめ、歌もだめ、ひよっとしたら不良の素質だけがあるのかも知れないわ

よ、あんた」「なるなら一流になったらいいわ。生半可な秀才より余程気が利いている」と言われる。鮎太はその夜、ノートに「翠檜」という言葉をいっぱい書きつけた。「あすなろ」「あすなろう」という呼称がまわっている擬人的伝承内容が『あすなろ物語』の主題と深くかかわっていることはいまでもない。

井上靖に「あすなろのこと」という随筆があり、その冒頭に次のように書かれている。「私の郷里伊豆では檜のことを『あすなろ』と呼んでいる。昔もそうであつたが、現在でもそうである。私の郷里の家にも門のところの大きな檜の木があつて、私たちはそれをあすなろと呼んでいた。大人でもひとりでは抱えられない程大きな木で、落雷のために内部が空洞になつてい

て、他の樹木と違っているとこが子供の私には誇らしかった」——マキというやまとことばは、優れた樹木を意味し、杉・檜などを指す時代もあつたが、今では、イヌマキ・ラカンマキ・コウヤマキの汎称となっている。内田武志著『静岡県方言誌・分布調査第一集・動植物編』（アチックミュージアム彙報第六・一九三六年）を見ると、旧賀茂郡・田方郡では、檜の木のことをアスナロ・アスナローと呼び、その実のこともアスナロ・アスナローノミなどと呼んでいたことが記されている。

マキの実



井上家の門口にあつたアスナロ（マキ）は、その太さからしてイヌマキだつたと思われる。イヌマキは雌雄異株だとされるが、井上家のものは雌株だつたと推察される。それは、湯ヶ島の隣部落、長野の浅田喜朗さん（昭

和十五年生まれ）が井上家のアスナロの木にのぼって熟れた木の実を採って食べたことがあると言うからである。イヌマキの種子は白緑色の球状をなし、秋、花托（かた）が暗紅色の液質の果肉になる。暗紅色になると食べごろで爽やかな甘味がある。白緑色の球状の種子を頭に見たて、暗紅色の冬瓜型（とうがん）の花托を胴に見たててその総体をサルッコ・エドボーズなどと呼ぶ地もある。筆者が少年時代を過ごした静岡県牧之原市松本の家の門口にも井上家ほどには至らないが太めのイヌマキと、疎らなマキの垣があり、実がなつた。実をヤゾーコゾーと呼んで花托が色づくのを待ちかねて採って食べたものだった。

屋敷林や屋敷垣にはその地方の自然環境に対応した形態や樹種構成、そして地方ごとの呼称がある。広く知られているものに宮城県のイグネ、富山県砺波平野のカイニヨなどがある。神奈川県西部から伊豆半島にかけてはこれをシセキと呼ぶ。屋敷林・屋敷垣以外にも、屋敷の特定の位置の樹木を代々守り継ぐ習慣がある。例えば、静岡県の遠州灘ぞいの地では、屋敷の



生家のアスナロと井上靖（『新潮文学アルバム 井上靖』より）

▲ 井上靖『新潮社・一九九三年、八十二頁』。マキは長い時間をかけてゆっくりと生長する。木質は硬く、樹皮は灰白色で浅く縦裂し、処々に苔をまとう。井上家のマキのごとき巨樹は風雪に耐えて生きぬいた翁おきな・姫おんなのようでもある。こうした門口の樹は、外との境界木であり、結界の象徴、家の象徴でもあった。不可視の、邪悪なるものを防ぐと考えられてきたにちがいない。

宮城県の大崎平でイグネについての学びを重ねてい



門守りのヤマモモ（伊豆市湯ヶ島長野、浅田喜朗家）

乾隅いぬいずみ（西北角）に地の神（屋敷神）を祀り、その背後にヤマモモやシイの木を植えて守り継ぎ、それが巨樹になっている例が見られた。井上家の門口にあったアスナロの古木にはどんな意味があったのだろうか。

下田街道ぞいの湯ヶ島の中心部からその東奥の長野に向かうと、門口にヒノキ・ヤマモモなどの巨樹・古木を守っている家を見かけ、かつて門口に巨樹があったという話を耳にする。浅田喜朗家・浅田美代子家はヤマモモ、浅田憲太郎家はヒノキ、野口久二家はアスナロだったが今はない。こうしてみると井上家のアスナロも決して孤立したものではないことがわかる。門口の巨樹・古木は、現実的には防風の役割を果たしてきたのだが、これを守り継ぐ習俗の基層には家の守り木と見てきた心意が窺える。井上家の場合、アスナロが避雷針の役割を果たし、母屋を落雷から守ったのであった。その痕きずあとを背負った魁偉かびらいなる樹相なればこそ靖少年に誇らしい気持を抱かせたのである。落雷の痕が溝状に走る太い幹、天空に樹高を誇るアスナロの横に和服姿で立つ井上靖の写真がある（『新潮文学アルバム

た折、大崎市伏見の門脇徳夫家、同市砂押の村上貫一郎家の門口にヒイラギの古木が守り継がれているのを見かけた。ヒイラギの枝にイワシの頭を刺して、節分に玄関口に飾る例は全国的に見られる。ヒイラギの葉の突刺性には家に入らんとする邪悪なるものを防ぐ力があると考えられたからで、門守りのヒイラギの木も同断である。

「あすなるのこと」の後半には井上靖が下北半島で、雪の季節にあすなるの大原生林を見たこと、あすなるの花粉交配が厳冬の吹雪の中で行われる話を紹介している。北のアスナロ、ヒノキアスナロのことである。

樹木については『しろばんば』の中にも注目すべきものがある。おぬいお婆さんの故郷を訪れた時の洪作とお婆さんの会話である。「大きな家だった？」「なんの。ちいちゃな家だった。背戸に大きな椎の木があつてな、家に似合わぬ大きな木があつたんで、その木に敗けて、家は潰れてしまった。」——ここには樹霊信仰、アニミズムの匂いが色濃く漂っている。



どんどん焼きの火で書初めを燃す（伊豆市湯ヶ島長野）



どんどん焼き（伊豆市湯ヶ島長野）

②クロモジの力

「十四日は、どんどん焼きの日であった。どんどん焼きは昔から子供たちの受け持つ正月の仕事になっていた。この朝は洪作と幸夫が下級生たちを指揮した。子供たちは手分けして旧道に沿っている家々を廻り、そこのお飾りを集めた。本当は七日にお飾りを集める昔からのしきたりであったが、この頃はそれを焼くどんどん焼きの当日に集めていた。橙を抜き取ってお飾りだけ寄越す家もあれば、橙は勿論、串柿までつけて渡してくれる家もあった。お飾りは、田圃の一隅に集められ、堆高く積み上げられた。幸夫がそれに火を点けた。火勢が強くなると、「みんな書初めを投げ込め」幸夫は怒鳴った。子供たちは自分が正月二日の日に書いた書初めを、次々にその火の中に投げ込んだ。洪作も幸夫も投げ込んだ。そしてその仕事が終わると、くろもじの枝の先端につけた小さい団子をその火に焼いて食べる、このどんどん焼きの中で一番楽しい仕事へと移って行った。この日は、男の子供も女の子も一緒だった。……」（『しろばんば』）。同じどんど

ん焼きについて『幼き日のこと』には、子供たちが字々に分かれてどんどん焼きをしたこと、各家々では、正月飾りともにくろもじの枝にさした団子も子供たちに渡していたこと、大人たちも団子を焼いていたことなどが書かれており、「こんなうまいものは食べたことがないと思う」との感懐が示されている。

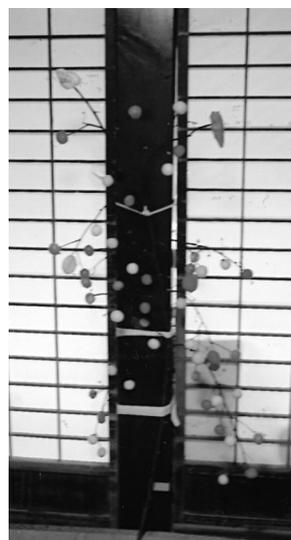
井上靖が「馬飛ばし」見物の道中、粘土採取などのために通いなれていた東奥の隣部落長野では今でも子供たちによるどんどん焼きが行われている。本来は長野の中の沖組（奥）・中組・下組の三箇所、一月十四日に行われていたのであるが、平成二十六年には一月十二日（十四日に近い日曜日）、午前五時から全長野地区で一箇所、大人たちの協力を得て行われた。

小正月行事の中心をなすどんどん焼きは、関西ではトンドと呼ぶ地が多い。「左義長」「サイト焼き」などと呼ぶ地もある。『しろばんば』に見える、正月飾り、書初め焼きは各地に共通しており、書初めが高く舞い上がった子は字が上達すると言い伝えも広く見られる。また、どんどん焼きの灰を屋敷に撒くと蠅除け



どんどん焼きの団子焼き（伊豆市湯ヶ島長野）

になると伝える地もある。長野の浅田喜朗さんはどんどん焼きの燃え残りの木片を屋根にあげると防火の、縁の下に入れると水難・諸難除けの呪いになると伝える。洪作（井上少年）が最も強い反応を示すのはクロモジの枝に刺した団子、その団子焼きであり、団子の



小正月の花団子（伊豆市湯ヶ島長野、浅田喜朗家）

味である。クロモジの枝に刺した団子はどの家でも神棚・歳神棚・エビス棚・仏壇・塞さいの神などに供えた。浅田喜朗家では今でも、米団子・俵・山葵・繭玉・椎茸・里芋などの模造団子を米の粉で作る。これらを「花団子」と総称するが、これは、その年の作物の豊穰予祝の呪物となっているのである。長野下組の浅田くみさん（大正十年生まれ）は小正月の団子について次のように語る。団子用には毎年米を二升使った。米を洗い、よく乾燥させてから石臼で粉化した。どんどん焼き用の団子は神仏に供えるものよりやや大きくした。クロモジの枝の長いものには七個、短いものには五個つけた。この団子をどんどん焼きの火で焼いて食

べると風邪もひかないし、流行病にもかからないとい伝えた。クロモジの芳香が団子に移るので香りもよくおいしかった。クロモジは天然林の下に生えていたが今は減ってしまった——。浅田喜朗さんは鹿が増殖してから特に減ったという。また、クヌギやカシワの枝に刺した団子は徴かびるがクロモジの枝に刺した団子は徴かびないとも語る。石川県白山市白峰でも、小正月、米団子の繭玉をクロモジの枝に刺していた。

クロモジはクスノキ科の落葉低木で枝を折ると芳香を放つ。和菓子に添える楊枝の素材として広く知られる。クロモジの葉・皮を蒸留してクロモジ油と称し、香水・石鹸・化粧品などの香料にする。天城山麓からもその原料としてクロモジが出荷されたことがある。

クロモジについてはさらに広く見てみたい。東北地方や新潟県などでは今でもクロモジのことをトリキ・トリキシバなどと呼ぶ。柳田國男は『神樹篇』の中の「鳥柴考要領」（初出一九五一年）でクロモジ即ちトリシバについて次のように記している。「京都でもこれは鳥柴という名称が行われていた。そうしてその名の

起りも不明ではなかった。多くの鷹匠の家の伝書、または上流武家の間では、鷹狩の獲物の鳥を人に贈るのに、必ず一定の樹の枝に結わえ付けて持って行く作法があったが、中でも四季を通じて最も普通に用いられたのがこのクロモジの木であったゆえに、それで鳥柴という名が生れたのであった。……私はそれから一歩を進めて、以前は人ばかりか神様に狩の獲物を奉る場合にも、やはりこの木を選択したかということを考えている。奥羽・北陸等の山間の村で、獵師が獵を終って毛ほかいまたは毛祭（熊の皮を剥ぎ、再度その皮をかけて熊の霊を送る儀礼）という祭を行う際に、同じ鳥柴の小枝に、獲物の一小部分を切って挟んで、山の神に供える風習は今でもある。」——また、山陰一帯では、小正月の餅をクロモジに刺し、クロモジを福木と称したことにふれている。さらに、中部地方で盛んな御幣餅ごへいもちが神に神饌しんけんを捧げる形の一つだったとし、西美濃の山村に、クロモジの枝に飯の固まりをつけて供える形があることを語り、神に捧げる諸物をクロモジの枝に刺して供える形があったと考えている。してみる

と、井上靖が少年の日に親しんだどんどん焼きのクロモジ団子や神仏に供えたクロモジ団子は古層の日本文化の美しい伝統の一つだったことがわかる。

さらに、柳田は同論の中で、「榊葉の香をかぐはしみとめくれば云々」という神遊びの古歌をひき、古代には、榊は今の真榊とは限らず、多種あり、その主流の一つに「芳香」を発するクロモジがあったことを推察している。このことは、鳥柴が単に鳥の臭いを消すという目的にとどまることなく、神に芳香を献じ、芳香によって神をお招きしようとする信仰心意があったことを考えさせてくれる。熊を対象とするマタギ系の猟師がクロモジの枝に肉片を刺したことが紹介されているのであるが、熊を対象とする猟師はさまざまな形でクロモジを使ってきた。新潟県魚沼市大白川では、熊狩に入る前、里山と狩場との間にある山の神の祭り木、ブナの巨樹のもとで入山儀礼を行った。狩猟組で一本のクロモジの枝を用意し、個々の猟師がおのおの和紙に馬の姿を版刷りにして紙捻でクロモジの枝に結びつけた。クロモジの枝は総状・幣束状をなした。こ



塞の神の頭にどんどん焼きの灰を載せる（伊豆市湯ヶ島長野）

クロモジは猟師が神様からたまわった木だとする伝承がある。クロモジは雨の中でも雪の中でも着火しやすいというのである。積雪地帯ではクロモジを輪カンジキの素材の一つとして大切にしてきた。

れを、ブナの木の根方に挿し立てて豊猟と山の安全を祈った（住安正信さん・昭和二十六年生まれ）。岩手県岩手郡雫石町切留では、熊を捕獲するとその場で熊を頭北伏位に寝かせ、その右肩上の雪の中にトリキシバ（クロモジ）のケズリカケ（皮を剥き、上部に羽状の削り（削ぎ）を削り出したもの）を立てて呪文を唱えた（横田捷世さん・昭和十八年生まれ）。焼畑の火入れに際しても火の安全を祈って焼畑地の上部にクロモジの枝を立てる儀礼が静岡市葵区田代・静岡県榛原郡本川根町梅地・長野県下伊那郡天龍村坂部などで行われていた。鳥取県八頭郡智頭町上板井原では、正月にコヅミ木と称し、庭の牛つなぎの杭に、ヌリダ（ヌルダ）・フクギ（クロモジ）・クリノキの二メートルほどのものを縛りつけた。これに米粒を包んだオヒネリを十二個、閏年に十三個くくりつけた（平尾新太郎さん・明治四十一年生まれ）。こうしてみると、クロモジの枝が、幣束や神籬に相当するものとして重要な働きをしてきたことがわかる。

静岡県榛原郡川根本町から静岡市葵区井川にかけて、

へドンドン焼きや十四日 猿のケツアーマツカッカ
火つけるぞ 火つけるぞ――

と子供たちは大声で叫びながら各戸をまわって点火を告げた（浅田喜朗さん）。長野のどんどん焼きにはもう一つ大きな特徴がある。火の盛りに書初めを燃し、火が静まって燻状になってから団子を焼く。どんどん焼きの火が消えると子供たちは水をかけた黒灰をバケツに入れて下組のムラ境近くにある塞の神に向かう。その頃はもう明るくなっている。子供たちは上級生から学年順に黒灰を塞の神の頭上に載せる。頭上には灰の山ができればいい。沖組にも塞の神があり、こちらは沖組の子供が灰を塞の神の顔や体に塗りつける。この異なる習慣は一体何を意味しているのだろうか。

下組の浅田くみさんは、かつては下組の塞の神の石像をどんどん焼きの火の中で焼いたと語り、沖組の浅田喜朗さんも、二体ある塞の神像の古い方を火の中に入れていたと言う。筆者も静岡県御殿場市萩蕪で一月十四日のさいと焼きに道祖神を火の中に投げ込むのを

見たことがあった。塞の神や道祖神の石像を火で焼くという信仰心意は、一年間、ムラびとたちに降りかからんとした厄災を代りに背負ってくれた塞の神・道祖神をどんだん焼きの火の中に入れ、その厄災を焼き払い、塞の神・道祖神に再生してただこうというものである。どんだん焼きの灰を、塞の神の頭上にかぶせたり、顔や体に塗りつけるといふ長野の子供たちの行為は、焼くことの代替儀礼だとみてよからう。

下田街道から一步はずれた奥隣の長野には古層の民俗が種々伝承されている。井上靖の原郷はこうしたところにも連っている。今後、さらなる探査を進めてみたい。

③ 植物利用と月の盈虚みぎま

「本家にはへちま棚が作られてあった。もともと夏の西陽を避けるために作られたもので、秋風が吹き始める頃になると、へちま棚の使命は終ってしまう。九月の終りか十月の初め頃のことであろうと思うが、本家の祖母は毎年のように、へちまの茎からへちま水を

採った。へちまの茎を地面から一、二尺のところまで切って、それを折り曲げて、ビール壘びんの口に挿し込む。

そしてそれが外れないように壘の口のところを油紙で包んで、紐でしばっておく。そうした作業はいつも月夜の晩に行われた。月の出ている夜が、いいへちま水が採れると言われていたからである。月夜のこうした作業は、子供の私にも何がなし淋しいものに感じられた。……ビール壘は二、三日、そのままにして置かれる。時々へちま棚の下に行って覗いてみると、へちま水はその度に少しずつ量を増している。へちまの茎からもう一滴の水も採れなくなると、祖母はビール壘をとり外し、おかのお婆さんの分として、その内容物の幾らかを小さい壘に移してくれる。こうして採ったへちま水は無臭であるが、顔や手につけると、やたらにつるつるした。村に一軒ある薬局に持って行くと、香料を入れてくれたが、本家の祖母も、おかのお婆さんも、無臭のものを貴しとしていた。冬が近くなると、幼い私も、風呂から出る度に、やたらにへちま水を顔や手になすりつけられたものである。へちま水を採る

のは、本家の祖母ばかりではなかった。へちまの棚のある農家では、どこでも女の人がへちま水を採った。」

〔「幼き日のこと」 傍線筆者〕

へちま水にかかわる民俗が詳細に記録されている。

特に注目したいのは傍線を引いた部分である。一体なぜへちま水が月夜と関係するのだろうか。見逃しがたい伝承である。実はこの伝承と対照的な、植物伐採と月の盈虚にかかわる伝承がある。和歌山県田辺市本宮町皆地の田畑清乃さん（明治四十二年生まれ）から昭和六十三年に次のような話を聞いた。——満月を中心とした月夜めぐりの日（昼間）に樹木や竹を伐採すると、伐採した素材に虫がつき、長持ちしない。木や竹を伐採するのは闇夜めぐりの日でなければならぬ

——。田辺市本宮町発心門の野下定雄さん（明治三十七年生まれ）は、「竹は旧暦八月の下闇しもやみが伐り旬」だと語った。こうした伝承は熊野から奈良県の吉野地方を中心に各地で語られてきた。類似の伝承はオーストリアにもある（エルヴィン・トーマ著、宮下智恵子訳『木とつきあう智慧』地湧社・二〇〇三年）。筆者は、月

の盈虚と植物伐採の伝承は細胞の活動に関係するにちがいないと推察してきたが、確信が持てないでいた。

ところが、井上作品に登場する「へちま水採取と月夜の伝承」を読み直し、両者を並べて見た時、霧が晴れてゆくような爽快感を覚えた。——満月を中心とした月夜ざかりには植物の水あげが盛んになる。したがってへちま水はたくさん採れる。対して、建築用木材や工芸用竹材を月夜ざかりに伐ると、木や竹が水分を多く吸いあげているので、虫がつきやすく、耐久力も弱くなると考えることができる。井上靖は鋭い感性と強い記憶力によって、単に旧暦の月夜めぐりの日というのではなく、祖母が月光を浴びながらへちま水を採取している姿を書きとどめているのだ。長野の浅田喜朗さんは萱葺かやぶき屋根に使う竹材の伐期を、旧暦で「八月の闇竹」「九月の闇竹」「十二月の闇竹」と伝えている。天城山麓には「植物利用と月の盈虚」にかかわる深い伝承が生き続けてきたのである。

井上作品や天城山麓にはこの国の民俗の謎を解く鍵が散りばめられている。

ヤクーツクを訪ねて

光太夫と靖に導かれた旅

浦城恒雄

(東京工科大学名誉教授・井上靖長女の夫)

平成二十六年六月、ユーラシアンクラブが主催した総勢十二人のシベリアの旅に妻の幾世とともに参加した。成田からハバロフスクへ飛び、アムール河を八十キロほど下った少数民族ナナイ人(先祖はアイヌ人と共通とも言われている)の住むシカチアリヤン村を訪問した。村人の歓待を受け、小学校に宿泊した。翌日は船に乗って河岸の岩に線刻画として刻まれた岩画を見に出かけた。最も古いものは約一万三千年前と推定されている。

翌日はハバロフスクに戻り、市内見学ののち、飛行機でサハ共和国(ロシア連邦内共和国。面積は日本の八倍強、人口は約百万人、四五%強がヤクト人)のレナ

畠山禎さんと貿易商の斎藤桂子さんの部屋となった。

井上靖は昭和六十年の六月中旬、東京放送(TBS)の「シベリア大紀行」の撮影班に同行してヤクーツクへ行っている。「おろしや国酔夢譚」を書く前年の昭和四十年と書き終えた翌年の昭和四十三年の二回シベリア旅行をしているが、ヤクーツクへは行くことができず、十七年ぶりのシベリア旅行でやっと訪問できて大変うれしかったようである。エッセー『河岸に立ちて』には「レナ河(一)」「レナ河(二)」と二編のエッセーを書いているし、詩では『傍観者』に「夏祭」「ヤクーツクにて」「年の初めに」、『星蘭干』に「ヤクーツク讚」「月光」と合わせて五つの詩を書いている。もう一度行ってみたかったようで「年の初めに」には「今年、多少無理しても、出掛けて行かねばならぬところが二つある。一つは楼蘭。……もう一つは、レナ河の結氷に立ち会いたいのだ。」と書いている。

「おろしや国酔夢譚」では大黒屋光太夫ら六人は同

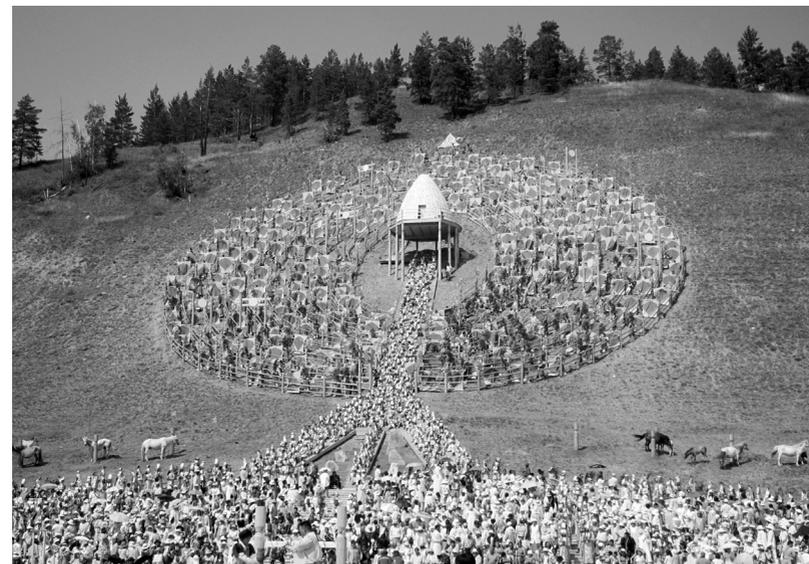
河(長さ世界第八位)西岸の首都ヤクーツクに約二時間半かけて飛び、午後十一時半に着いた。しかしまだ明るく、白夜であった。バスで市内の大きな劇場の前まで行き、そこへ迎えに来ていた三軒のホスト・ファミリーの家に四人ずつ分宿することになった。我々のホストはマリヤ・ガヴリリエヴァ・オシボヴァという女優さん夫妻(ともに六十代)で、ご主人のヴィクトル(元建築関係のエンジニア)さんの運転で近くのアパートの四階へ連れていかれた。食堂と居間と洗面所、階段を上がると寝室二つと風呂場という造りで、女優さんの家らしくきれいに飾られていた。居間のソファが大きなダブルベッドになって、我々の部屋となり、階上の寝室は一緒に参加した横浜ユーラシア文化館の

行者十一人と共に一七八八年九月十二日にオホーツクを出発し、十一月九日に凍結したレナ河を櫓で渡ってヤクーツクに着き、一ヶ月余り滞在して十二月十三日にイルクーツクに向けて出発している。『北椏聞略』^{ほくさぶんりやく}における大黒屋光太夫の見聞体験記録に加えて、ドイツ博物学者グメリンの『一七三三年―一七四三年間のシベリアの旅』(一七五二年刊)、オクラードニコフの『ヤクト自治共和国史』(一九五五年刊)、エルギスの『ヤクト人の伝承』(一九六〇年刊)などを参考にしてヤクーツクについて二十頁も割いて書いている。

冬の寒さのデータ、ヤクトという名称の謂れ(「もとツングース人が用いた名称で、それをそのままロシア人がうけついで。ヤクト人は自分のことをサハと称している。」、ヤクトの言語・民族(「基本的にはチュルク語に属し、周囲の北方系の民族とは全く異っている。遙か南方の中央アジアや南シベリア方面の種族と似通っていて、北方において島のように孤立している民族といえよう。」、ロシアとの関わりの歴史、シャーマンに関する伝承などが詳しく述べられ、旅行ガイドをしのぐものである。



手を挙げて夏至の日の出を拝むサハの人々



サハ人の夏祭、イシアフ。靖は見る事が出来なかった

翌朝は地元食材で作られたおいしい朝食をいただいた後、夏至の前日から開かれるサハ人（ヤクート人）たちの伝統的な夏祭（イシアフ）に出かけた。バスに一時間乗り乗って会場に着いた。会場はとても大きな広場で正面の小高い丘の斜面には柵がスパイラル状に九周張られ、中央には高さ数メートルの大きなユルタ（モンゴル語ではゲル）が建てられ、広場には巨大な木造の祭壇が作られていた。気温は三十度以上の暑さであったが、民族衣装で着飾ったヤクーツクおよび近郊に住む多くのサハ人たちが集まっていた。イシアフは自然崇拜の祭り、中央アジアの夏の馬乳酒祭が起源といわれ、チュルク（トルコ）系の祭りの特徴が多く含まれているようだ。サハ人は一年を夏至と冬至で二つに分け、夏至の前日から当日にかけて祝うイシアフを新年と呼び、自然と人の誕生と再生を祝ってきた。長い冬が終る祭りに集い、次の朝まで馬乳酒を飲み、民族的なゲームやレスリング、競馬、英雄叙事詩（オロンホ）の語り、オスオハイ（輪になって踊る民族舞踊）が行われた。十七世紀にシベリアを旅行した

イデスの旅行記にすでに記述されているそうである。一九九一年ソ連崩壊時にヤクート自治共和国からサハ共和国になった時、憲法が制定されてこの日が共和国の祝日となり、年々大規模化した。特に演出家であったボリソフ氏が文化大臣に就任してからショー志向の盛大な祭りとなった。二〇一二年には一万五千人以上で三十六の輪が作られ、約二十分間にわたって様々な民謡を歌いながら踊り、ギネス世界記録の認定を受けた。サハ人にとってはオスオハイに参加することで魂が浄化されると考えられている。

広場から少し離れた建物でボリソフ文化大臣の招待客は昼食を振舞われ、大臣の挨拶があった。ひとまず町へ戻り、宿泊先に帰った。翌朝二時に出発して白夜の中をイシアフ会場に到着した。太陽から出されるエネルギーが最大となる夏至の日の出を拝む「太陽を迎える聖なる儀式」と呼ばれる祭りのハイライト・イベントが始まっていた。真っ白い衣服と帽子で身を包んだ多数の男女が踊る中で参加者は太陽に向かって手を掲げて祈る壮大な儀式である。



サハ共和国から大野透氏に贈られる湖の命名・授与式。左より、現地のシャーマン、大野氏、ポリソフ文化大臣

詩集『傍観者』の中に「夏祭」という詩がある。靖は残念ながら夏祭そのものは見ていない。「ヤクーツクの波止場から船に乗り、レナ河を降って、九〇キロ下流のソウチンツイ村を目指す。明日の夏祭に備えて、その準備に追われている村の賑わいを眼に収めるためであった。／併し、ソウチンツイ村はただ静かであった。大きな青い空と白い雲、その下に広がる草原の一面に、神の降り給う神殿として、四本の柱が建てられている。神を迎え、その前の広場で、神に捧げるために、大きな円陣を作って、賑やかに踊るといふ。／私はそれを聞いて、一種言い難い痛烈さで、レナ河で水垢離して、一人の異国人として、この祭に列したい思いを持った。」と書いている。この頃は比較的素朴なイシアフだったのであろう。エッセー「レナ河(二)」でもこの訪問を書いている。

次の日の午前は街のショッピング・センターへ買い物に出かけた。その後、バスで一時間ほどの郊外に出

た。長年にわたってサハ共和国との文化交流に尽くした大野透ユーラシアンクラブ会長に対し、ポリソフ文化大臣からヤクーツク郊外にある池を、オオノオゴンニョルキョレ（尊者大野老人）湖と命名し、その利用権を授与されることになり、そのセレモニーに参加するためである。サハは池の多い国で、七十万を超える池があるらしい。池の候補は三つ用意されており、最初に立ち寄った池は今一つだったが、次に行ったところは大野さんも大臣も満足したようでそこに決定した。セナ河にも近く、小山を背にした美しい池で、周りの草原には放牧された数十頭の馬が走り回り、青いあやめの花が咲き乱れていた。早速に両氏とシャーマンの女性によって命名・授与式が催され、そのあと数枚のござが敷かれ、沢山のご馳走と酒が並べられて宴会が始まった。街に帰ってからも大野さんの宿泊先で旅行社の社長と通訳も参加した宴会が開かれた。

ヤクーツク滞在の最後の日、午前にはオコンスキー記念文学博物館でサハの文学者や報道関係者との懇談

会があった。ある文学者の「サハ人は言語から人種的にチュルク系と見られてきたが、最近の研究ではモンゴル系との混血がかなり見られることが分かり、最近チングス・ハンを主人公にした小説を書いた」との発言に大変興味をそそられた。

午後は靖も訪れた永久凍土研究所へ行き、厚手のコートを借りて地下十二メートルにある凍土を見学した。北半球で最も気温が低い寒極（マイナス七一度を記録したオイミヤコン）もサハにあり、ヤクーツクも冬の寒さが非常に厳しく、一月の平均気温はマイナス四〇・九度で厳寒期にはマイナス五〇〜六〇度になることがある。またサハの多くは永久凍土地帯であり、地表近くから二、三百メートルの深さまでが凍っているが、夏は二メートルくらいまでが溶けてしまう。靖も「ヤクーツク讀」で「家は一軒残らず傾いていた。大地震のあとの町に入ったかのようにであった。右へ傾いている家、左へ傾いている家、前へ、背後へ、それからまた、沈んでいるものもある。二階の窓が歩道まで下がっているのも、さして珍しくない。永久凍土地帯に



ホスト・ファミリーの別荘にて。手前左がヴィクトルさん、右がマリヤさん。中央奥が私共夫婦。その右に斎藤さん、畠山さん

造られた町の通れられぬ運命であった。……何年か前に、この町の郊外から、ダイヤモンドの原石が発見され、世界中を騒がせたことがあった。それは神のこの町への贈りものであったのだ。」と書いている。今でも傾いた木造の家は散見されたが、五階建て程度のアパートやビルが沢山建てられている。直径五十〜百センチ、長さ十数メートルの鉄筋コンクリートの杭を数メートル間隔で打ちこんで、その上に建てられたいわば高床式の建物が多い。建物の熱が凍土に伝わるのを減らすためである。またダイヤモンドは今や世界一の産出量となり、宝石用では二五%の世界シェアを占める重要産業に育っている。

夕方ホスト・ファミリーの別荘に招待された。車で三十分足らずの郊外にあり、池のほとりの千平方米前後の敷地に二階建ての別荘があった。敷地内には花や野菜が沢山植えられ、冬以外はほとんどここで過ごすということだった。車を降りると蚊の大群の挨拶を受けたが、建物の入り口近くでは馬糞が焚かれており、これにより蚊が近づかないとのことだった。マリヤさ

んの兄夫婦も呼ばれており、合わせて八人がマリヤさん手作りの夕食をワインやウォッカと一緒においしくいただいた。畠山さんの通訳で会話も弾み、またたく間に夜中の十二時近くになり、お暇しようとする庭にあるサウナに是非入っていけといわれた。焼けた石が十数個あり、ヴィクトルさんがそれに水をかけると大きな音とともに水蒸気が大量に発生し、その中で庭の白樺の枝を束ねたもので背中をピシリ、ピシリと打ってくれた。これがサハ流のサウナ入浴法とのことだった。白夜の午前一時半ごろアパートへ帰り、四時過ぎに起きてハバロフスク経由で帰国した。

帰国後、光太夫の帰り道はどうだったのかと「おろしや国酔夢譚」を開いてみると、「ヤクーツクに着岸したのは六月十五日の午刻であった。……七月二日、オホーツクへ向けてヤクーツクを発した」とたった三行で、この時のヤクーツクの記述は全くない。しかしなんと靖や我々が滞在していた時期に、光太夫もヤクーツクに滞在していたのだ。さらに驚くべき記述が続

く。

「ヤクーツクからは馬の旅であった。……一番難渋なことは昼夜の別なく夥しい蚊の群れが襲来してくることであった。時には馬は体全体を蚊で覆われ、馬体が見えないほどになった。……夜の野宿の時には木綿の蚊帳を吊って、その中にはいり、馬糞の乾いたのを焚いて蚊を避けた」

ヤクーツク旅行はまさに光太夫と靖に導かれた楽しい旅であった。

父とゴルフ

井上卓也
(井上靖・次男)

前回、趣味なき父のことを書いたばかりである。というように、ゴルフは父の趣味ではなかった。

しかし、父は時々ゴルフに出かけた。父のゴルフは野望タイプのゴルフではなかった。一生に一度はホールインワンを達成したいとか、一度は七十台で回りたとか、そんな野望とは父は無縁だった。そんなことは夢にも考えたことはないであろう。

でも全然練習しなかったというわけではなくて、写真のように仕事の手が空くと、たまに庭の芝生で素振りをしたり、アプローチの練習をしたりはしていた。

僕は、おそらく二十回ほどは、父のゴルフのお供をしたと思う。父が行ったゴルフコースはいえ、神奈川県の秦野の近辺にあるスリーハンドレッドクラブ、

それから新と旧の軽井沢カントリー、そしてやはり軽井沢のすぐ近くにある大浅間ゴルフクラブぐらいか。大浅間を除いては、なかなか庶民とは、縁が薄い名門コースである。そんなコースに父の七光りで、僕もプレイさせてもらった。

そんな父とのゴルフ行きで分かったことは、父はスポーツとしてのゴルフにはおよそ熱が入らなかった。もちろん、当時すでに父の年齢が高かったこともあるが、父と同じ歳ぐらいの作家や画家の方でも、野望タイプのゴルフをされていた方もいらした。丹羽文雄さんとか生沢朗さんとか。

では、父は何のためにゴルフをしたか。それはもっぱら、普段の文士の方々との、お付き合いの不義理の

お詫びのためであった。父は編集者の方や、友人たちとは、とても付き合いはいいほうだったと思うけれど、同業者とは、はっきり言えば意識して交際を避けているようなところがあった。文学賞のパーティなどでは、

有名作家と嫌でも顔は合わせていたけれど、その輪の中に入ることは煩わしいと思っていたに違いない。同業者たちとの酒の付き合いは性分にあわなかったのだ。あんなに酒のみだったのに。



日々の練習の努力もあえなく……

けれども、夏を迎えて軽井沢の山荘を訪れるようになる、普段の無沙汰を詫びるように、近隣に山荘を持たれていた作家の皆さんと連れだって、ゴルフへ出かけた。メンバーは源氏鶏太さん、水上勉さん、柴田錬三郎さんを初め、多士^{たし}濟々^{せいせい}の皆さんだった。

都会の仕事の延長の中での交際は煩わしくても、避暑地では、友達同士のように和気藹々^{わきあひ}とゴルフを楽しみ、まるでゴルフを普段の無沙汰の免罪符のように感じているみたいだった。

さて、そのゴルフの中身だが……。父は歩かないよ、歩く方がよいだろうといった、そんな心境の枯れたブレイを披露していたが、それでも作家仲間たちと冗談をいながら、父は実に楽しそうだった。もうスコアなどは眼中になく、なんとなく歩く茶話会みたいなゴルフに、僕には感じられたものだ。

ブレイが終了すると、皆さんお忙しい方ばかり、さっと帰られた。父はブレイが終了すると、さて、付き合いは終わったぞ、といった表情で僕なんかを相手に帰りのタクシーの中では、その時書いていた小説の話

父は、自分のゴルフを心得ていたのか、白洲氏とはゴルフのことは一言も話さなかったと思う。

さて、今、自分が年をとって思うのだが、六十を越した老人ができるスポーツといえば、ゴルフぐらいしかないから、父のゴルフ観の基礎にある、歩かないより歩くほうがいいだろう。は今の僕のゴルフのすべてでもあるのだ。

それからもう一つ、ゴルフに行く度に思い出す父の一言。若い頃、僕はよくテレビで、プロのトーナメントの中継を見た。父はそんな僕を見て一言。

「オザキだかアオキだか知らんが、ゴルフは、見るものではない、するものだ」と。

をしたりしていた。

僕が、ご一緒させていただいた方で、とくに印象に残っているのは、白洲次郎氏のこと。といっても、ご一緒にブレイをしたというのではなく、丁度白洲氏がブレイを終えられて、クラブハウスに引き上げられて来られた時のこと。この時の白洲氏は本当の晩年だったと思うけれど、父は僕に、いつも来客時に、自宅でもそうしているように、お茶でも誘ってきた白洲氏に対して、「キミ、白洲さんだ、ご挨拶しなさい」と言った。僕は、白洲氏のお名前ぐらいは知っていたが、どこかの大きな会社の社長さんだろうぐらいに思った無知な若者だった。

白洲氏は僕の顔を見て、お前などに話すことは一言もない。といった厳しい表情で、「君はどこに勤めているのか」といった意味のことを一言だけいわれた。戦後の日本を立て直した方に声を掛けていただくなどということは、父とゴルフに行かない限り有り得ないことであった。白洲氏はゴルフの名人としても高名な方だった。

鳩のおしらせ②

◎平成二十六年「あすなる忌」

毎年、井上靖の命日（二月二十九日）に近い日曜日を選び、墓参をはじめ、生地・湯ヶ島で井上靖を偲ぶ催しを行っています。

とき…平成二十七年一月二十五日

十時 墓参（熊野山墓地にて。熊野山への送迎あり、九時三十分在天城会館に集合）

（以下、天城会館にて開催）

十一時 井上靖作品読書感想文コンクール表彰式

十二時三十分 劇団「しろばんば」による演劇上演

主催…伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会

共催…井上靖文学館・井上靖記念文化財団

問い合わせ…伊豆市教育委員会社会教育課

☎〇五五八―八三一五四七六

事業報告

理事長 井上修一

平成二十五年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

(一) 井上靖を記念する文化賞

文学、美術、歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」は、今年度の再開を目標に関係機関と協議、相談を続けておりましたが、いまだに再開の目途が付いておりません。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

「井上靖（奨励金）賞」は、オーストラリアにおける日本文学の研究奨励のため、平成十八年にシドニー大学に設立したものです。選考はシドニー大学の

井上靖（奨励金）賞選考委員会にお願いしてあります。今年度はその第七回になりますが、ウォロンゴンの大学のヘレン・キルパトリック博士（論文“Envisioning the Shōjo Aesthetic in Miyazawa Kenji’s ‘The Twin Stars’ and ‘Night of the Milky Way Rain’”）にぜひあげることになり、平成二十五年九月二十日、シドニー大学・国際交流基金シドニー・本財団共催、豪日経済協力委員会・シドニー日本人会等の後援で、シドニー音楽院にて授与式が行われました。

平成二十五年八月、ベトナムにおける日本文化・文学研究者への助成事業について、国際交流基金ハノイ事務所へ助成対象者選定業務を依頼しました。

また、井上靖文学の研究団体である「井上靖研究

会」の機関誌『井上靖研究』刊行のために助成をいたしました。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○旭川市立「井上靖記念館」

平成二十五年四月一日、旭川市立井上靖記念館と展示資料寄託契約（一年）を更新

常設展示会とともに、以下の企画展などを共催で実施

平成二十五年四月二十七日から七月二十八日、第一回企画展「井上靖と旭川」展の共催（五月十八日には関連の「井上靖講座」）

平成二十五年六月一日、『旭川市井上靖記念館報』第十三号の発行に協賛

平成二十五年八月三日から十一月十七日、第二回企画展「井上靖 人と文学Ⅳ 戦争体験」展の共催（八月二十四日には関連の「井上靖講座」）

平成二十五年十一月二十三日から平成二十六年二月十六日、第三回企画展「井上靖 現代文明批判」展の

共催（十二月七日には関連の「井上靖講座」）

平成二十六年二月二十二日から四月二十日、第四回企画展「井上靖と天災地変」展の共催（三月八日には関連の「井上靖講座」）

○長泉町「井上靖文学館」

平成二十五年三月二十八日から七月二十三日、企画展「鑑真遷化一二五〇年 天平の薨」の後援

平成二十五年七月二十五日から十二月十日、「井上靖の詩視詞」展の後援

平成二十六年一月九日から三月二十五日、「今でも『氷壁』とナイロンザイル事件」展の後援

○鳥取県日南町「日南町総合文化センター井上靖文学室」

展示資料寄託契約のもとに資料展示に協力

○米子市「アジア博物館」内「井上靖記念館」

平成二十五年十月一日、友の会会報『海鳴り』第三

十四号の発行に協力

(四) 日本近代文学に関する資料収集及び調査研究

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行うとともに、平成二十六年三月、日本近代文学館の資料収集に協力しました。また当財団の資料収集・調査研究結果などを掲載発行している当財団機関誌『伝書鳩』第十四号を発行しました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

○平成二十五年六月二日、井上靖文学館（長泉町）で黒田佳子による講演「『天平の薨』について」を実施

○平成二十五年七月二十七日、井上靖研究会の夏季研究会が國學院大學渋谷キャンパス院友会館で行われ、本財団からも参加いたしました。尹芷汐氏（名古屋大学大学院）の研究発表「歴史小説における〈異民族〉と〈多民族〉——井上靖『蒼き狼』、『敦煌』を読み直

す」、荻谷桃子氏（名古屋大学職員）の研究発表「『猟銃』における語りの構造」、小田島本有氏（釧路工業高等専門学校教授）の講演「『しろばんば』における語り——過去を素材に再構成すること」が行われました。

○平成二十五年九月二十日、前項（二）のシドニー音楽院での授与式の後、昨年に続き磯田秀樹夫妻の指導・演出による「井上靖とシルクロード敦煌——音楽と画像と詩の朗読」が開催され、井上靖作詩、高田三郎作曲の合唱曲などの演奏、黒田佳子による「井上靖の詩の朗読と解説」が行われました。

○平成二十五年十月六日、井上靖文学館（長泉町）で黒田佳子による講演「父・井上靖の詩について」を実施

○平成二十五年十二月十四日、井上靖研究会の冬季研究会が尚綱学院大学で行われ、本財団からも参加

いたしました。蔡慧穎氏（北海道大学大学院）の研究発表「『蒼き狼』論争からみる井上靖文学の大衆性

——『敦煌』と『蒼き狼』を中心に」、勝倉壽一氏（東北文科大学教授）の研究発表「井上靖と補陀落渡海」、加藤正名氏（尚綱学院理事長・学院長）の講演「父を語る——沼津中学時代、井上靖と同級・同部」が行われました。

○平成二十五年十二月十五日、旭川市教育委員会（主管・井上靖記念館）・北海道新聞社主催、本財団後援で、全国の中・高校生を対象にした第二回「青少年エッセーコンクール」の表彰式が井上靖記念館で行われました。募集テーマは「ともだち」。審査員長は吉増剛造（詩人）、審査員は平原一良（北海道立文学館理事）、竹田智（北海道新聞社文化部長）の各氏です。

最優秀賞

中学の部 浅井美穂「思いを伝える」（小樽市立望洋台
中学校二年）

高校の部 福田茉央「まみちゃんの笑顔」（愛光高等

学校一年

○平成二十六年一月二十六日、「あすなろ忌」井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）・本財団共催、伊豆市・静岡新聞社・静岡放送などの後援で開催されました。伊豆市湯ヶ島熊野山墓地での墓参会、午後には旧湯ヶ島小学校にて、井上靖作品読書感想文コンクール優秀作品の発表・表彰式が行われました。

最優秀賞

小学生の部 菊池智貴「檜になりたい」（天城小学校六年）

中学生の部 水野菜桜「子どもの守り神」（筑波大
学付属中学校一年）、山下真奈「友達を通じて知る、
〈新しい世界〉」（愛光中学校一年）

高校生の部 鈴木あさひ「業行に捧げるオマージュ」
（東京芸術大学附属音楽高等学校一年）

その後、「朗読と音楽のしらべ」が開催され、黒田佳子等による朗読とフルート三重奏の演奏が行われま

した。

○平成二十六年三月二日、井上靖文学館（長泉町）で黒田佳子による講演「今、『氷壁』を読んで」を実施

（六）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係する次のような催しがありました。

○秋山庄太郎展

平成二十五年四月二日から五月十二日、新潟市新津美術館にて秋山庄太郎による井上靖の肖像写真を展示

○旧制高等学校記念館（松本市）常設展

平成二十五年四月、『わが青春・旧制高等学校』（ノール書房）に掲載されている井上靖の「五陵の少年」の一部引用と掲載されている肖像写真の展示

○井上靖文学館（長泉町）文学展講座

川工業高等専門学校教授）「井上靖『孔子』と『論語』——孔子と弟子たちとのつながり」

平成二十六年一月二十五日、講師・片山晴夫氏（北海道教育大学特任教授）「井上靖の小説を読む——初期作品の魅力について」

○井上靖ナナカマドの会（旭川市立井上靖記念館内）

平成二十五年八月三十日、『赤い実の洋燈』四十二号（井上靖ナナカマドの会発行）

○世田谷文学館コレクション展「旅についての断章」

平成二十五年十月五日から平成二十六年四月六日、井上靖の肖像写真、行った旅、そこから生まれた作品の紹介展示

○斎藤康一写真展「THE MAN——時代の肖像」

平成二十五年十一月二十一日から十一月二十七日、キャノンギャラリー銀座にて、斎藤康一による井上靖の肖像写真を展示

平成二十五年四月十四日、講師・松崎哲氏（平山郁夫美術館研究員）「井上靖と平山郁夫——シルクロードの世界」

平成二十五年九月二十九日、講師・福田美鈴氏（詩人福田正夫詩の会代表）「シリア沙漠の少年」朗読と話

○茗溪会静岡県支部・講演

平成二十五年六月三十日、クーポール会館（静岡市）にて、講師・井上修一「王子と孤児」

○旭川市立井上靖記念館開館二十周年記念事業・文学講演会

平成二十五年七月二十日・二十一日、講師・藤澤全氏（日本大学講師）

一日目「旭川と井上靖——文豪の安らぐ新天地」
二日目「洪作という他者——井上靖の自伝的領域」

○旭川市立井上靖記念館文学講座

平成二十五年九月二十一日、講師・石本裕之氏（旭

○「遠藤周作『侍』展——人生の同伴者」に出会うとき」

平成二十六年一月十八日から三月二十三日、町田市民文学館ことばらんどにて、遠藤周作の井上靖宛書簡展示

○第十七回 伊豆文学フェスティバル

伊豆文学フェスティバル実行委員会・静岡県・静岡県教育委員会主催、旧湯ヶ島小学校体育館（伊豆市）にて

平成二十六年三月二日、第十六回伊豆文学賞表彰式、伊豆文学塾（審査員（村松友視・嵐山光三郎・太田治子）による講演会・座談会）

○伊豆文学まつり

伊豆市・伊豆市教育委員会主催、伊豆市内にて
平成二十六年一月二十六日から三月二日、伊豆天城短歌コンテスト入選作展示・伊豆文学散歩・井上靖作

品読書感想文コンクール入選作品展示・伊豆市ゆかりの文学作品朗読会・伊豆市ゆかりの文学作品特別展示・ミュージカルしろばんば・しろばんば劇団創作劇

(七) 役員

平成二十五年度の本財団の役員（理事、監事）、評議員は次の方々でした。

- 理事長 井上修一
 - 常務理事 浦城幾世
 - 理事 伊藤 暁 大越幸夫 狩野伸洋 佐藤吉之輔
 - 監事 佐藤純子 曾根博義
 - 大谷光敏
 - 評議員 井上卓也 相賀昌宏 小西龍作 黒井千次
 - 篠 弘 三木啓史 三好 徹 山口 建
- (五十音順)

なお、理事の曾根博義氏をご都合により平成二十六年よりご退任になりました。氏は平成十六年より

評議員を、平成二十四年より理事をお務め下さり、本財団のためにご指導、ご尽力いただきました。また『井上靖全集』（新潮社）の編者として獅子奮迅の御活躍をいただきました。この場を借りて心より御礼申し上げます。



◎井上靖文学館（長泉町）企画展

○「食べる」文学展

平成二十六年七月二十四日～十二月二十五日

「通知簿を貰う日は、いつもおぬい婆さんは、彼女の最も自慢の料理であるライスカレールを作った。」

『しろばんば』『幼き日のこと』など井上靖の自伝的作品を中心に、作品に登場する食べものや、復刻レシピを紹介します。

【展示】

①井上靖自伝的三部作『しろばんば』『夏草冬濤』『北海』の「食べるもの」

おめざ、ライスカレール（レシピ）、黄色いゼリー、そばがき、トンカツ

②「中国行軍日記」（レプリカ）と「山葵羊カン」レシピ

井上靖は三十歳にして応召。北支行軍の日記には「山葵羊カン」は幾度も登場します。

③今、食べたい！ 井上ゆかりのお店を紹介
ライスカレール、おめざ、うどん、お酒など、ゆかりのお店を紹介します。

【見どころ】

井上靖の幼少時代である大正期の子供茶碗や食器、そのほか作品に登場する食べ物を紹介します。「中国行軍日記」（レプリカ）や井上靖が文学館で講話した時のグラスなども初公開。

【催し】

文学館スタッフによる「企画展トーク」
会期中の毎日曜日・十三時～十三時三十分

問い合わせ・井上靖文学館

静岡県長泉町東野クレマチスの丘（スルガ平） 五一
五―五七

☎〇五五―九八六―一七七―

図書だより



二〇一三年四月以降に刊行、発表された井上靖に
関係する書籍、論文、記事等をご紹介します。

【書籍】

- 小野寺荅『心の旅——井上靖紀行』（土曜美術社出版、二〇一三年）
- 瀬戸口宣司『詩』という場所——井上靖・高見順・野呂邦暢・村山槐多』（風都舎、二〇一四年）
- 藤澤全『井上靖の小説世界——ストーリーテラーの原風景』（勉誠出版、二〇一四年）

【論文・記事】

- 李哲権「井上靖の想像力の世界と海のイメージ——

散文詩「少年」を読む」（『国文学年次別論文集 近代4 平成22（2010）年』朋文出版、二〇一三年十月）

- 佐々木誉実「井上靖『氷壁』執筆の動機について」（『日本山岳文化学会論集』十一号、二〇一三年十一月）

○高木伸幸「井上靖文学における「学問」——「敦煌」試論」（『別府大学国語国文学』五十五号、二〇一三年十二月）

- 岩田ななつ「久坂葉子と井上靖——「井上靖宛未発表はがき」（県立神奈川近代文学館所蔵）翻刻と考察」（『国文鶴見』四十八号、二〇一四年三月）

○趙秀娟「井上靖文学における「川」」（『福井工業大

学研究紀要』四十四号、二〇一四年六月）

- 塚野耕「井上靖『レンブラントの自画像——小説家の美術ノート——』を読む」（『絵の華・本の華』ユニオンプレス、二〇一四年七月）

【読書感想文集】

- 伊豆市教育委員会社会教育課編『入選作品集——井上靖作品読書感想文コンクール 平成25年度』（伊豆市教育委員会社会教育課、二〇一三年）
- 井上靖記念館編『井上靖記念館青少年エッセーコンクール優秀作品集』（井上靖記念館、二〇一四年）

二〇一四年七月二十日に発行された『井上靖研究』第十三号の主要な目次を紹介します。

【論文】

- 小田島本有「『しろばんば』における語り——過去を素材に再構成するということ」

○蔡慧穎「中国における『天平の薨』と『敦煌』の受容状況」

- 尹芷汐「埋蔵／発見される異民族の歴史——「楼蘭」『敦煌』論

○何志勇「『鳩』に見る井上靖の精神遍歴」

○西座理恵「井上靖と〈中国〉について考える——問題提議のための試論」

【エッセイ】

- 福田美鈴「笹本正樹さんを偲ぶ——短歌誌「篁」の思い出など」
- 黒田佳子「私は自分一人のために光を追ふ貪欲な蛾である」

○瀬戸口宣司「「かりそめ、仮初、苟且」——詩集『傍観者』を読む

編集後記

『伝書鳩』十五号が出来ました。心温かい文章をお寄せ下さった執筆者の方々に、御礼申し上げます。

九月に、祖母井上ふみの七回忌の法要が湯ヶ島でとりおこなわれました。子供の頃から毎年訪れていた湯ヶ島ですが、二〇〇九年の夏に祖母の新盆で訪れて以来、二人の子を生み、五年ぶりでした。

墓地は今も変わらずきれいに手入れされていました。が、傍に植えられた木々は以前よりしつかりと大地に根づき、枝を伸ばしていました。

妙本寺での法要が始まると、お経にびっくりしてクスクスと笑い出した、祖父母のひ孫たち。この幼さを包みこむような、湯ヶ島ののどかさ。その中を洪作少年が走り回る姿を思い浮かべることができました。

新年の一月二十五日には、あすなる忌があります。地元の方々による劇団「しろばんば」は、今回どのようにに楽しい芝居を見せてくれるのでしょうか。

西村承子

伝書鳩 第15号

発行 二〇一四年十二月二十日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九 井上芳

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団